スペイン発

音に色が、痛みから色や形が――知られざる「共感覚」の世界

文・写真／羽生のり子　HANYU Noriko　写真提供／Carol Steen

「音に色が見える」「肌への刺激で色や形が見える」。一つの刺激に対して五感のうちの複数の感覚が同時に働くことを共感覚と言う。決して多くはないが世界中にいる共感覚を持つ人たち。彼らが見る世界とは？

アルハンブラ宮殿で有名なスペインのグラナダは、細い小路がクモの巣のように張り巡らされた魅力的な街だ。由緒あるグラナダ大学の学生数万人が住む大学都市でもある。今年4月28日から5月1日まで、グラナダ市とグラナダ大学、ミラノ工科大学デザイン学部、芸術活動や交流を促進する「アルテ・チッタ」財団が共同で、第2回「共感覚――科学と芸術」国際会議を開催した。

共感覚とは、一つの刺激を受けた時に五感のうちの複数の感覚が同時に働く現象で、音を聞いて色が見えたり（色聴）、何かを味わった時に形が見えたりする。最近は共感覚についての翻訳本が出版されたり、映画が作られたりするなど、日本でも少しずつ知られるようになった。

グラナダの国際会議に出てみようと思ったのは、私自身が共感覚者だからだ。子どものころから自覚していたが、だれにも言ったことがなかった「数字と文字に色が見える」感覚が共感覚の一種であることを、数年前に初めて知った。しかし、これまでほかの共感覚者に出会ったことはなかった。共感覚について理解を深め、自分と同じような共感覚者に出会えることを楽しみにして、グラナダへ向かった。

「科学と芸術」という名からわかるように、会議の内容は、科学的研究と、芸術活動における共感覚の発現および共感覚的な表現についての研究報告だった。芸術関係の発表の中で一番説得力があると感じたのは、キャロル・スティーン氏の体験発表である。彼女は共感覚を芸術活動に生かしているアメリカ人の美術作家で、パトリシア・リン・ダフィーの『ねこは青、子ねこは黄緑』（早川書房刊）にも出てくる人物だ。鍼治療を受けた時や、尺八の音楽を聴いた時に色が見えた体験を基に描いた作品について説明した。共感覚は、意識して出せるものではない。自然に出てくるものなので、その表現は理論や計算から出たものではなく、ポーンと飛んでいる。スティーン氏の作品からは、飛んでいながら、作者が全面的に自分の感覚を信頼している様子が感じられ、見ていて気持ちがよい。

Carol Steen "Clouds Rise Up"「雲が昇る」
2004-05年 油彩 ©Stuart Tyson
テンポの遅い尺八演奏を聴いた後に制作。演奏時に見えた「雲が昇る」様子を表現した。各音調から2つの音が聞こえ、2つの色（赤とオレンジ色）が見えた

鍼治療中に現れた色と形の動きを表現した作品について、説明するスティーン氏 ©Carter Jones

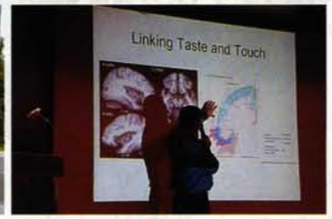
五十音は何色？

会場で8人の共感覚者に出会った。オーストラリア人2人、アメリカ人2人、スペイン人2人、ドイツ人1人、日本人1人。動きに色が見える人、音に色が見える人とさまざまだ。初対面でも、共感覚者同士の間には、地下水脈でつながっているような親近感がある。

色聴者の脳活動についての研究を発表した関西学院大学理工学部の長田典子教授は、ハ長調などの音楽の調性に色が見える色聴者だ。自分の脳の中で何が起きているのかを知りたくて、脳研究を始めたという。文字と数字にも色が見える。この点は私と共通しているので、さっそく見える色を比べてみた。

五十音のそれぞれの子音の行に基調色があることでは一致していたが、その色は異なっていた。長田教授の「か」行は緑系だが、私の場合は橙色系だ。ひらがなの色と数字の色はまったく違う。漢字の色には同じものもあった。

英文学者で米国共感覚協会会長のショーン・A・ディ氏は、「文字に色が見えるインド・ヨーロッパ語圏の共感覚者のうち、43パーセントの人がAは赤だと言う。Iは黒か白、黄白。Oは白という人が多い」。これは、私にはまったく当てはまらない。「文字と色」の組み合わせについての報告はほかにもあったが、すべてアルファベット言語圏からのものだった。



米国共感覚協会会長のディ氏がマイクを向けるのは、音に色が見えるアメリカ人のジャズギタリスト、トニー・デカプリオ氏（右）©Carter Jones
アメリカ人研究者エドワード・ハバード氏が、共感覚が働いている時の脳の状態を説明する（右下）
オーストラリア人の共感覚者と意見を交わす長田教授（左下）

私の仮説では、「共感覚者の文字と色の組み合わせの基本は母国語にあり、外国語を学ぶ時は、母国語の文字の色が影響する」。長田教授にとっても私にとっても、「五十音の子音とアルファベットの子音の色は同じ」である。日本語の色が英語やフランス語に転移しているのだ。「か」の橙色は、Kの橙色に通じている。これは、非アルファベット言語にも当てはまる。アラビア語を学び始めた時、単語の頭に来るか最後に来るかで形を変える字があることに仰天し、Kの発音に相当する字が2つあることに悩み、いったいどうやって色が見えてくるようになるのかと思った。つまり、最初はまったく色が見えなかった。それが今では、Kの発音でも、ﻙは明るくはっきりしたオレンジ色に、ﻛはくすんで重い橙色に見える。私の場合、日本語でも英語でもアラビア語でも、発音が似ていれば色は似てくる。ということは、言語を学ぶ時に、色と発音と形が組み合わさっているのではないか。

自らが色聴共感覚者であり、多くの事例を知るディ氏に見解を聞いた。「そういう共感覚者もいます。一方、発音が伴わず、形と色だけの人もいます。文字の形を知らない言語を学び始めた共感覚者には、最初は字に色が見えません。学習して、その言語に親しみが出てくると色がついてくるようになります」。

共感覚の個人差は大きい。自分一人の例から推論して結論を出してはいけないのである。ディ氏が運営する共感覚掲示板を見ていると、「こんな共感覚もあるのか」と驚くばかりだ。カミングアウトする共感覚者が増えるにつれ、わかっている組み合わせの種類はどんどん増えている。研究者にとっては、手がかりと課題が同時に増えたようなものだ。解明の方法は、ますます複雑になるのではないだろうか、というのが私の印象だ。MA

共感覚についてもっと知りたい人は

第2回「共感覚――科学と芸術」国際会議のウェブサイト（英語あり）
http://www.sinestesia2007.info/

関西学院大学理工学部長田ゼミの共感覚についてのウェブサイト
http://ist.ksc.kwansei.ac.jp/~nagata/synesthesia/index.html

米国共感覚協会のウェブサイト（英語）
http://www.synesthesia.info

羽生のり子
1991年からパリ在住。日本の新聞雑誌に寄稿するフリーランスのジャーナリスト。日仏の女性を対象に、女性のためのヨガ、ルナ・ヨガ®教室を主宰。現在、アラビア語とヒエログリフを勉強中。